

電波塔物語

アマタとイルサ  
AMITRORXA

2001年 盛留真悟作品

電波塔物語第一「アマタとイルサ」

アマタ（人間の少年）

イルサ（ニワトリビトの少年）

こびと（オスタークの地元青年団。基本的に一人三役）

森の主（オスタークの主。あるときはまもの）

第一場「学校帰り」

アマタ オスタークの深い深い森の中には電波塔があるという。

そして、電波塔は願いを叶えてくれると誰かが言っていた。

電波塔に行くと言い出したのは僕のほうだった。

かけがえない友人、ニフトリビトのイルサとの最初で最後の冒険。

アマタ まず、学年で考え方が変なんだよ。勉強の進み具合で決めればいいのにさあ。

イルサ やあ、アマタ

アマタ やあ優等生

イルサ おや、優等生、こ機嫌斜めだね。

アマタ 人間の優等生は進級に一年かかるんだ。

イルサ そんなことで怒ってるの？

アマタ いいよなあニフトリビトは半年で進級まできて

イルサ だからアマタと同級生でいられるんじゃないか？

アマタ 微妙にそういうことじゃないんだよな。なんか変じゃない。

ニフトリビトの成長が早いのはわかる。勉強も早い。

でもどうして人間にはその進級方法ができないわけ？

イルサ 今日先生と喧嘩したのはそれか？アマタはせっかちだね。

アマタ 人生なんかあつという間だよ。こないだ生まれた僕ももう小4だ。

イルサ 僕は生まれて3年目で、今小4だ。

アマタ そこだよな。人間だと11年かかって、ニフトリビトだと3年で4年生。

だから昨日校長先生に会ってきたんだ。

イルサ へえ。で、どうだった？

アマタ 全く話通じなかった。明日担任に説明させるよ。って帰された。

イルサ で、今日会って。

アマタ 結局よくわからない。「お友達と同じが一番でしょう」とって。

「そういう問題じゃなくて、次の勉強早くしたいんです

大人になったら覚えられなくなるから」って言ったら先生怒っちゃって。

イルサ それは大人ははかだかって意味でしょ。大人が聞いたら怒るよ。

アマタ そうかなあ、僕は子供のうちにしか覚えられないって意味でいったんだけど。

イルサ 同じだよ。相手の立場で考えるとがまだできない？

アマタ まるでわからない。

イルサ だろうね。勉強したがっている子供も一部の大人には嫌われると思うよ。

アマタ ああ、もうちょっとわかりやすいことは使ってくれよ。

イルサ 要するにみんながみんなアマタみたいに勉強したいわけじゃないって言ってるんだよ。

アマタ 僕、強制されるの嫌いなんだよね。

イルサ その言葉は3年早いよ。

アマタ なんでー、かっこいいじゃん。

イルサ そいつところは子供っぽいよね。

アマタ 4歳直前のイルサに子供扱いされるとは。

イルサ 君は年でものを判断するわけ？

アマタ うっん。大人ごどもって区別ない。

イルサ 妙な矛盾がそこにはあるなあ。

アマタ あ、そつだ。

イルサ 話が変わるんだね

アマタ 電波塔の噂って聞いたことがある？

イルサ んー、あるようなないような

アマタ あのねオスタークの奥の方にあつてね。願いが叶うんだつて。

イルサ へえ、叶えた人は？

アマタ 子供の頃電波塔を見つけて、今は王様つて人がいるみたい。

イルサ それつてこの国だよね。どうして他の人も王様になろうとしなかったのか不思議だよね

アマタ 他の人が王様になりませんよつて願つたんじゃない？

イルサ お見事。

アマタ あとね。鶏も願つてニワトリビトになつたんだつて。

イルサ 何がしたかつたんだろつ

アマタ 話とかしてみたかつたんじゃない？人間と

イルサ はー、くだらない願い事だなあ。

アマタ そんなことないよ。話ができるつて面白いよ。そのうち草とかとも話してみたい。

イルサ アマタはきつと立派な學者になるね。

アマタ そうかなあ。でも、それもいいなあ。

イルサ アマタは夢とかあるの。

アマタ えっとねえ。サブナとが行ってみたい。

イルサ それってすごく遠いところだよな。

アマタ 海を越えた先にあるんだよね。何日かかるんだろう。でも行ってみたいなあ。

ねえ、イルサの夢は？

イルサ 飛びたい。飛んでみたいなあ。上から降るだけでもいいや。

アマタ どうして？

イルサ 一応これでも鳥の一種なんだよ。羽根なんかどんどん退化してみただし。

アマタが大人になる頃には僕の孫なんかすっかり人間っぽくなってるとさうし、

羽根なんかほとんどなくなっているだろうなあ。ああ、羽根がなくなる前に飛びたいなあ。

どうかした？

アマタ うん？うん。

イルサ 変だよ。

アマタ どんどん追い抜かれるなあって。

イルサ へ？

アマタ イルサなんかどんどん大人になって進化までしてるのに、

僕の育つのがなんて遅いんだろうって。

イルサ なに言ってるんだか

しょうがないじゃないか。僕はニフトリビトで君は人間なんだから。

アマタ そうだよな

正面を回く

イルサ ニフトリビト。鶏から進化した人間に似た生き物。

この進化はあまりにも急で、

僕のひいおじいさんが間違いなく鶏だったことからまじく最近の出来事だとわかるだろう。

僕らがなぜ急激な進化をしたのかはまだわかっていない。

それは別としても。



人間とニフトリビトはよき友人として、仲良く社会を構成していた。

アマタ

どちらの子供も同じく学校へ行くけれどその学習ペースには明らかな違いがあった。

ニフトリビトは1歳頃から小学校へ入り、6年分を二年ちよつとで学んで進学する。だから僕ら見たいな友達は珍しかった。

イルサ

人間とニフトリビトこの組み合わせが友人だということが

アマタを説得しようとした先生にはわからなかった

でも僕は先生が心配しているというところも知っている。

アマタは勉強はできるけど、人間の友達がいない。

アマタには勉強のできない子の気持ちがわからないので、平気で人を傷つけるところがある。

アマタ

イルサにまわりには同じ年のニフトリビトがいない。

学年が進んでもイルサには一緒に学び続ける仲間がいらない。

彼はいつもひとりだった。そして、僕もひとりだった。

二人 先生のそばの席で並び、僕らは自然に友達になっていた。

アマタ そして、学校帰りに僕は言った

電波塔を探しに行こう！

『電波塔物語 アマタとイルサ』

第一場 「待ち合わせ」

光あふれる朝の牧歌的景色。

イルサがいる。

イルサ アマタは格好良く誘ったことになってるだろうけど、事実は違う。

行きたくない僕は無理やりアマタに連れて行かれるのだ。

アマタ入って来る。

イルサ やあアマタ。時間どおりだね

アマタ イルサ、早く来てたんだね。

イルサ マメなほうでね。

アマタ マメってなに？

イルサ こまめとか几帳面とかそんな意味。

アマタ ああ、ちょっとわかる

イルサ それより、その格好なに？

アマタ なにして？

イルサ だから格好

アマタ いつもどおりだよ。

イルサ いつもどーりいーいー？

アマタ どうかした？

イルサ どうかしたじゃないよ。一度おうちへ帰らない。



食へ物は？着替えは？

アマタ ああ、ああ、ああ。

イルサ ああ、ああ、ああ、こつて早へ気ついてよ。

アマタ 気ついてたよ。

イルサ じゃあ、なんでいつもどおりなんだよ。

アマタ どうせ二人分持ってきたんでしょ。やだなあ、僕が自分で用意できるわけないじゃん

イルサ ……。

アマタ どうしたの？

イルサ ときどき思うけど、アマタってアマタだよな。

アマタ 意味わかんないよ。

イルサ ふん。もういいよ。じゃあ、半分持って。

それぞれ荷物を持って二人は歩く。

第三場「森の入り口」

木漏れ日に満ちた、森の入り口。

イルサ で、ここが森の入り口だね。

アマタ はじめは獣道を伝って奥まで行くんだ、で、そのうち、

子供にしか通れない深い森になるから、そこが探検だね。

イルサ アマタってこの森に詳しいの？

アマタ 詳しいってほどじゃないけど、深いところ以外ならなんとなくわかるよ。

イルサ へえ、じゃあ、今日はじめて深いところに行くんだ。

アマタ 初めて？そうか、初めてだよね。

イルサ なに？微妙なの？

アマタ なんていつか邪魔が入るんだよね。

イルサ 邪魔？

アマタ なんていつかぶうつつて。

イルサ 虫かな

アマタ 虫にも似てるけど人間にも似てる

イルサ なんだろう

アマタ そのうちわかるよ

イルサ 虫に似てて人間に似てる・・・さてはムシビト

アマタ 違う！ムシビトなんていない！こんなの。

イルサ なにそれ。

アマタ 見ればわかるんだよね。ぶっぶっうんて。

イルサ ねえ、あの辺から暗いよ。

アマタ あそこらへんへんへんとぶっぶっうんて出てくるんだ。

イルサ 新種かな。

アマタ なんか昔からいるみたいだよ。お父さんがねこれ使えって。

イルサ ん？なにそれ？

アマタ ツブツブの粒でできてるんだけど、なんか花が挟まっているんだよね。

イルサ へえ、ちょっとさわらし、イテ！

アマタ なんかたまにバチってなるんだよね。

イルサ 聞いてから触ればよかった。

アマタ うわ。

イルサ ほら自分まで

アマタ バチって。

イルサ 痛いね。何に使うの？

アマタ なんかたまに聞こえるんだよね

イルサ 内容は？

アマタ わっかんない

イルサ でもお父さんが持っていていけって言ったんだよね。

アマタのお父さん電波技師だし、電波関係あるのかなあ？

アマタ するとこの声はお化けかあ？

イルサ はあ。この世はわからないことばかりだよな

アマタ うん。

イルサ わからないことっていっぱい

アマタ うん。

イルサ 日が暮れるのって早くない？



アマタ  
あ。

急に日が暮れはじめる。

アマタ どうしよう眠る場所

イルサ へへん。こついうものがあるんだよ。

アマタ テントだ、すこいやイルサ。

イルサ アマタ、テント建てられる？

アマタ ううん。

イルサ ……じゃあアマタは燃えるものを探して。

アマタ わかった。

アマタ テントで寝たのは初めてだった。狭かったけど面白かった

イルサ 日が暮れる前に準備して助かった。僕は暗いところでは目が見えない。

明日は暗い森に入る。今日よりももっと早く準備をしなければいけない。  
はしゃぎ疲れたアマタは、意外と早く寝てしまった。僕も・・・おやすみなさーい。

暗くなる。

第四場「朝」

薄く明るいテント内。

イルサ コツケー朝がきたー

アマタ なんだよー。

イルサ 朝だ朝だよツケーー

アマタ なんだよ元気良すぎるよ

イルサ 朝はなんだか絶好調。元気いっばい!。

アマタ うるさいよー

イルサ テントたたむよー。

テントから放り出された朝。だいぶ明るい。

アマタ さ、寒い。

イルサ 起きろー

アマタ もうおきるのお。

イルサ 絶好調な朝だよアマター。

アマタ ニワトリビバわっかない。

イルサ わっかない？イルサもわっかない

アマタ うー。

イルサ いくよアマタ、電波塔はまだまだ先だ！

アマタ ほんとだこい？

イルサ 今日ほぶうつとててごだよ。

アマタ ああそつたねえ。

イルサ ほらいくよって。

アマタ そういついていっているうちにテントたんだ。

イルサ これで荷物は全部だね。

アマタ 僕なんにもしたくないー。

イルサ いいから出発。ねほけてても歩く。

歩く二人。寝歩きするアマタをイルサは何度も戻っては引っ張っていく。

だんだんアマタも起きていく。

やがて薄暗くなり、今度はイルサの歩みが遅くなっていく。

第五場「森を守る青年」

イルサ ねえアマタこの辺から急に暗いね。

アマタ よう／＼音を聞いてね。

民族音楽のような音楽。獣を払う意味合いのもの。

イルサ 音楽？

アマタ うん。

イルサ だれがいるの？

アマタ たぶん、いない

耳を澄ますイルサには音楽が大きく聞こえる。

アマタ どうしたの？

イルサ 帰ろうアマタ。僕ら歓迎されてないよ。

アマタ どうして？

イルサ だってこれ僕らを追い出す音楽でしょ。

アマタ そんなことないよ。

イルサ 出てけ出てけって昔に聞こえる。入ったら食べられちゃうよう。

アマタ なんだよ。僕にはなんともないよ。

イルサ いいから田よひしひ。  
アマタ ここまでできてなんだよ。。。あ。

（ぶううううん）田の羽音のよひな響きを田で流し  
（ぶううううん）音効よりもアマタ、イルサが口に出すほうがやりやすい

イルサの手のひらに着地。

別のエリアマごひごひがはくはくしてこいぬ。

イルサ 本当だ。ぶうんだ。  
アマタ これ、なんか鳴ってる  
イルサ もっと大きな音にならない？  
ごびと こんにちは聞こえますか？  
イルサ ええ、まあ。  
アマタ なんかに言ってるの？

イルサ そつか。アマタと言葉が違うんだ。・・・君は誰？

こびと 聞こえるんですね？私は地元青年団のものです。

イルサ 地元青年団？

こびと 正式には「森を守る青年、有志の集い」の者です。通称「こびと」

イルサ うぎ。(ト「ト」)

こびと なにするんですか。

アマタ なんて言っているの？

イルサ 直訳すると「森を守る青年、有志の集い」通称「こびと」

アマタ こびとお？うぎしたいなあ。(ト「ト」)

こびと うわ。なんてこじするんですかあなたたち。

イルサ ぶざけんなはか、だつて

アマタ ていー！

こびと うわ。そ、そんなこと言っただけです。

イルサ 堅苦しい言葉で奴隷さくな奴隷ならなよ。そりゃ

アマタ ぶんぶん言っつてうるさくんだよ言葉をじかえ。

こびと 使ってるじゃないですか。

イルサ やるかこのーだって

アマタ なにー。

こびと またそんなことを。

イルサ まだここにいるつもりかー、だって

こびと いや、意味はあってますが今言っはひんつかと思っんですが

イルサ やーい手じだっ。

こびと 今、長い文章でしたよね。

アマタ このアマタ様を怒らせるとは不屈せんはん、この技をくらえーバチー……。

こびと ひょっ(よ)ける(る)。

そんなことしてゑ暇ないですよ。

イルサ なんだなんだ言いたいことでもあったの？

こびと ありますよー……ここから先は深い森です森の主の領域ですから入らないでください。

つかつにはいると危険です。

誰も助けには行けません。だから入らないでください。



イルサ ここから先は深い森です森の主の領域ですから入らないでください。

うかつにはいると危険です。

誰も助けには行けません。だから入らないでください。

こびと ありがとうございます。

アマタ やだ。

こびと は？

イルサ え？

アマタ 知らないよそんなこと。冒険に危険はつきものだし、いちいちかまってるられないわ

こびと いや、一瞬格好よく聞かせるんですが、やめてください。怪我しても知りませなよ。

イルサ 怪我しても知りませなよだして

アマタ 僕らは電波塔を目指すんだからそんなことじゃひびるまなひよ。

こびと でー電波塔？

アマタ 今の「で」電波塔？とかは合ってる？

二人 合ってる合ってる(こびととイルサ)

アマタ じゃあへんやへん

こびと ちよ、待ってってあー。

イルサ じゃあねえ。

こびと ああああ。待って

こびと あーあ行っちゃったよ。まものがいるって言いたかったのにさ。

電波塔にいく？なんにもかなえちゃくれないよ。

哨戒中のこびとに告ぐ、人間の少年とニフトリビトの少年各一名が森に侵入

まものをおごすおそれあり。警戒されたし。雷雨、地震にも注意しろ

連中の目標は電波塔。繰り返す。

少年二人の目標は電波塔！警戒されたし。

去り際。

こびと 気をつけていくなだよ。

こびとが去ると暗くなる。

第八場「暗い森」

アマタ こびとの忠告の甲斐なく、僕は森の奥へと入ってしまった。

イルサ まものがあるのかもよく知らずに僕は電波塔を目指していた。

アマタ まだお昼なのに森の中は暗かった

イルサ 暗い時間に起きている。子供には不思議な気持ちだ。

アマタ やっばりこまでくるとこわいね。

イルサ アマタは行動してから考えるんだね。

アマタ いつもは違っただよ。ううん。怖いのもわかった。

イルサ こびとは怖くなかったね。

アマタ まさか話ができるとおもっていなかった。

これが言葉に変えてイルサが人間の言葉に変えたんだね。

こびとが去ると暗くなる。

第八場「暗い森」

アマタ こびとの忠告の甲斐なく、僕は森の奥へと入ってしまった。

イルサ まものなんなのかもよく知らずに僕は電波塔を目指していた。

アマタ まだお昼なのに森の中は暗かった

イルサ 暗い時間に起きている。子供には不思議な気持ちだ。

アマタ やっばりこまでくるぞこわいね。

イルサ アマタは行動してから考えるんだね。

アマタ いつもは違っただよ。ううん。怖いのもわかった。

イルサ こびとは怖くなかったね。

アマタ まさか話ができるとおもっていなかった。

これが言葉に変えてイルサが人間の言葉に変えたんだね。

イルサ 僕には違いがわからないんだけどね。

アマタ イルサだけの特技かな？

イルサ 生まれつきのものだよ。ニフトリビトならみんなできるんじゃない？

アマタ まあ、話せて得した気にはならなかったけどね

イルサ でも。こびとは何をしたらかったんだろう

アマタ 話したかっただけでしょ

イルサ そうかな？

アマタ さんざんからかってたし。

イルサ その責任は微妙だな。

アマタ こびとって人間に似てたよね。

イルサ ニフトリビトが人間に似たトリなら、こびとは人間に似た虫だね。

アマタ 虫ももっと人間に似てた。

イルサ いや、あれはあれで進化し終わった姿なのかもね。

アマタ こびとって仲間とか多いのかな？

イルサ だってほら森を守る青年有志の集いだよね。集いっていったら集まりじゃん。

アマタ 森を守る青年はわかるんだよ。集いも何とか。でも有志のつてなに？

イルサ 有志かあ……。「はい、僕やります」って始める人。

アマタ 掃除当番とか？

イルサ それはみんなやるでしょ。

自分達でやりたい人だけで、集まるんだよ。青年っていうくらいだから、僕らより大人だね。

アマタ 青年て、大人？こども？真ん中？

イルサ 真ん中……質問は鋭いんだけど、子供だけでわかるのかな？そんなこと。

アマタ 大人になんかなりたくないねえ。

イルサ なりたいかどうかは別でしょ。

アマタ なるんだろつなあ、もの覚え悪くなるんだおつなあ。

イルサ せめて真ん中でいたいよね。

アマタが舞台中央へ。

イルサ なに？どセンター？上奥？上袖？……。

ああああ、ダメでしょ、持って来ちゃ。・・・○○(なにか小道具)?

アマタ

あたり。

イルサ

返してきなさい。

アマタ

はい。・・・お、ここから持って来たでしょー！

イルサ

はーあ。

アマタ

みんなにわかるようにしよう。

イルサ

あーあ。(返しして)

アマタ

雰囲気だいなしたね。ここ森の中じゃなかったけね。

イルサ

なんか陰謀めいてるなあ。

アマタ

いんげん弁当？

イルサ

じゃなくて、陰謀めいてるって言ったんだ。

アマタ

田んぼ、うめとんぼ？

イルサ

たねほりめいてるさっ。さっ。さっ。ほりめいてるさっ。ほりめいてるさっ。

アマタ

どしょ。

イルサ

こしょ。

アマタ で、どうよ。

イルサ やめなさいって、話進まないでしょ。

アマタ 話題に詰まったらこう言っただよつ。

イルサ だめです。関係ない質問しないの。

アマタ わーん。何がしたいのかわからなくなってきた！。

イルサ 少し、落ち着いて。話の流れを作ろう。

アマタ あれ？誰かに見られている気がする？

イルサ そうなの？

アマタ 森の、ずっと奥から。

イルサ 電波塔かな？

アマタ 電波塔が？

イルサ 森の主かな？

アマタ そういえばここ、森の主の場所なんだよね。

イルサ 森の主って何だろつ？

アマタ こわいのかな？



イルサ うん。この感じで行くよ。

アマタ たぶんこわい。

イルサ かえる？

アマタ まさか。怖いのも冒険のうちだよ。

イルサ 言っていることがちよこちよこ変わる気がするなあ。

アマタ 気分で話すからだよ。

イルサ もう、自分でいわないの。

第七場「森の主」

森の上空に上半身を出し、たたずんでいる

森の主 誰だ。人間をここへ通したのは。

私の人間嫌いは今に始まったものではない。

この森の全てがそれを知っているはずだといつのに、なんと無用心な。

たしかに私は遅かな昔より、この森を育んできた。

気づけばオスタークの主のような存在になっていた。  
年をとりの生命も等しく感じられるようになった頃、人間はオスタークを蝕んだのだ。  
嘆かわしい。

かつては星の半分が海、あとの半分が森だったというのに  
今やどの島も人間の土地半分、森半分だ。  
人間か。

わずかな種で、陸の半分を使おうなどは星の命をも考えぬおろかな生き物だ。  
いや、生き物の仲間から外れようとしている。  
そう。

人間がそのつもりだと気づいたとき、私は人間を守ることを辞めたのだ。  
私の怒りは大地を駆け巡り、いかなるものにも畏れられよう。  
その姿をまものという。

私は森の主、そして怒りの口はまものだ。  
しはし躊躇するがごとく。

それでも歩むのなら・・・恐怖を。

じり変わって森の中。

おびと  
おっ警戒？

人間とニワトリだっ？

おいおい、持ち場をきちんと守ろうぜ、ニワトリ族のおびと。

大きいって、相手は少年だろう。

おらうちなら、早食いじゃあ追いついてやめ。

まものっ、数年見てな。

第一なあ、まものっこのはびりっつて、まものっつて、時を待たな。

そう簡単に出てきやしないっ。

電波塔っおいおいそんな欲張り、早く追いつ返せ。

なっちよっ待て。

ニワトリ族のおびとが警戒してゐるが、

電波塔があっ。

おいおいおらうちのこ通るのかよ。面倒くせえなあ。  
しょうがねえ。二人はこの俺が引き受けた。

このミミタ族のこびとさんが押さえてやるぜ。とびっ！

そう遠くない場所。

イルサ うわーん。あまたああ暗いよお。帰ろうよつ。

アマタ あーもう、もうちょっと進もうよつ

イルサ 君はいいよねえ。これくらいでも目がよく見えるから

アマタ だったらいいじゃんーたったか進もう

イルサ だめえええ。イルサ、テントたむ。

アマタ まだ、夕方にもなっていないだよ。

イルサ 暗いなら同じだよ。

アマタ 何回、同じ話すんのさ。。。

イルサ 何回でも話すの。危ないものは危ない。

アマタ もついで、置くわ。

イルサ なんでひどい言い方するんだよ。

アマタ うるさいからもういい。イルサはここで待ってればいいよ。

僕は早く電波塔に行きたいんだから。

イルサ あ、ちょっと。

アマタ ここでまってなよ

イルサ あまたー

アマタ去る。

イルサ 又方はどっへにきてるんだよ。少し明るいのが変なんだよ。

アマタ、君は頭がいろいろのたぐいしてわからないんだよ。

別々に行動しても無理だよ。

僕は君を手助けしたいんだから。

ああもう、なるようになれだ。

イルサが追う。

アマタがより深い森へ進む。

アマタ イルサの石頭！いや、とさか！

ん？とさかって石？

あーもう、どうでもいいよ。

時間はどんどんなくなるんだよ、

イルサは・・・ニワトリビトはすぐに大人になるからすぐに死んじやうんだよ。

時間ないんだよ。君は大人になっちゃう。そうなる前に・・・。

早く電波塔に……。一緒に大人になりたい。

イルサ っじ。

アマタ 誰だ。

イルサ アマター、どこ？

アマタ えっどこ？

イルサ えっアマタどこ？

アマタ イルサ？どこ？

大きい声が響いて聞き取りにくい

イルサ じゃ、小さな声で。

あまたどこー

アマタ っじ。くらやじ

イルサ いまごへ

アマタ イタ。

イルサ え。どしたの

アマタ イタ。

イルサ なに

アマタ いた

イルサ もしかして。へわ

アマタ いて

イルサ へわ  
アマタ いて

イルサ。小さなランプのよつなものを灯す。

「近くしか照らせないシロモノ」であまり役に立たない。

アマタ うわ、いるな

イルサ わー、あまただ

アマタ あれ？ なにもいない

イルサ あ、それね。へわ

アマタ いて

イルサ こつこつほつとつするんくちほしがあたるんだよ。

アマタ うわっち。いてえ。

イルサ 自分で当たらないの

アマタ これはこれで面白いんだよ。



イルサ くちばしなんかで楽しんでかな

アマタ あれ？みよおおおおおん（何か虫のようなものを跳ねてくる音）

イルサ なんかさつきから。みよおおおおおん

アマタ 違う気がする。みよおおおおん。

こびと おいおいおいあんたらかい

電波塔に行きてえっていう物好きは。

いいか。よおくきくんだぜ。

こいこいらはおらうちの管轄でい。勝手に通ることはゆるさなえ。

いや。ひと言あっても通すかわかんええけどな。

あんたらはごもだからよくわかんええかもしねえけどな、こいつだけは確かだ

アマタ イルサ。これもこびとかな？

イルサ これで大きくなるかい？

じびと おいおいおい今までの話は聞いておえってじびとかい。

坊主でもお聞くかい

こつから先は危険極まりない森の主様の縄張りだあ。

怪我する前に帰るんだな。

イルサ 君もじびと？

じびと えうま。こぢいおぢい。

おらうちには森を守る青年有志の集いあつての熱田じびと。///ミッタの青年でい。

イルサ 名前は？

じびと なに言ってるんだおらうち様の種類は///ミッタ。あんたは「ワト」だ。おかしいかい。

イルサ え？僕が「ワト」だ？君が///ミッタ？・・・あ。そんな考え方もあるんだ！

アマタ なの話？

じびと そうだ。いから帰れ坊主さま。

イルサ 皆様お願いですからおれが帰ってくださるまは。だって

こびと おいニワトトビト！

ニワちゃああん。俺にはなんか違って聞こえるんだがよ。

ちゅうか、人間のこどもにはおらっちの言葉がわかんないってことかい？

イルサ いやあ賢そうなお子様ですねえ。だって。

こびと ほっほう。そういうハラカ、おらっちのことを冗談ですます気だな。

いいぜ。本当に知らないぜ。

イルサ あなた方が本当に行きたいのなら何もいうことはないですよ

こびと この先になあすんこくわああい魔物がいるんだぞ。

イルサ あなたがたならどんな困難も乗り越えることができるでしょう

こびと □先だけの願い事なんか電波塔は聞かないぜ

イルサ □先だけの願い事なんか電波塔は聞きませんよ

アマタ え？

森の主 そのとおりだ。

みんな、見上げる。

アマタ すき通ってるこれが？

みんな 森の主

森の主 やはりそう呼ばれていたか。多くは語らぬ。ここまで侵入した以上私に従ってもらおう。

アマタ 森の主人。話を聞いてください。

森の主 多くは語らぬといったはずだ。

アマタ 森の主人。

森の主 黙れ人間よ。ここから立ち去れ

アマタ いいじゃないか。はなしくぐり聞いてくわたくし

イルサ ああ。もういいよ。もういいよアマタ。もう帰ろうよ

アマタ やだ。僕は電波塔に行くんだ

イルサ いいよあぶないよ

アマタ うるさい僕は電波塔に願いがあんだ。

こびと やっほやお前も奇跡をアテにしてるワチか。

イルサ 奇跡？

こびと てめえでなにもしないで全部つまくいくわけがねえだろう

森の主 おおの。自らの身の程をわきまえていないよつだな。

「こゝまで言っても聞けぬのなら致し方ない。」

こびと いや。こゝはおらうちがなんとかしやすから穩便に・・・

森の主 ならぬ。私の怒り。この心につすまく悲しみを知れ。

うぬらにそれを与えよう

イルサ なにを？

森の主 恐怖を

#### 天変地異

アマタ うわあああああああ

イルサ うわあああああああ

こびと なんてえええええええ

みんなふつぷ。

森の主 私はいつまでこんなことをくりかえすのか？

(体調悪い感じ)・・・もうそんな時間か。

森の主さる。

第八場「被災」

寒そうな場所にごびごびがらる。

ごびごび じいさえええ。ててててて。うたぐてええなあ。

なんでおらうちまで善ま込まれくうんでい。カー。情けないったらありゃしねえよ

ミミタのごびごびとさんとまあらうじのおらうち様が一体全体どつしたっていつんでい。

ううううう。しかしきみいなあ。(うん)

オスタークにもこんな寒いところがあったなんてよお。  
ん？いや、場所のせいじゃねえ。

こ、氷！まじかよ。

ん？くんくんくん・・・あっちは火事かよ！

凍らせたり燃したりでたらめなことしやがって。

ちつくしよつ。あんなの森の主じゃねえ。せいぜいまものだ。

ん？森の主が怒るとまものになるのか？

あー。おらっちの持ち場大丈夫なのかよ？

つうか、ここは誰の持ち場だ？いやいい。どうせみんな救助活動だ。

ミミッタのごびとより全ごびとへ

ミミッタのごびとより全ごびとへ

森の主が怒り、まものが目覚めた。

ミソしや火事を確認した。被災地は必ず応援を求めよ。

森を守る青年の名にかけて全ての生き物を守れ！

繰り返す！ごびとの名にかけて森を守れ！

こびと駆けて行く。

木の上にイルサがいる。もそもそ動いている。

イルサ  
ううう。うわああ。

なんでこんなおっかない目にあわなきゃいけないんだよ。

そりゃあここは木の上だから明るいのよ。でもアマタ一体どこいったんだよ。

あーあ、命流どうすればいいんだよー。

あれ？あっちのほう煙出てない？

うわー、なんなの？一体、命流どうすればいいんだよー！・・・はー。

って質問しても、誰も答えてくれない。

はーあ。こんな時飛べたらどんなにラクなんだろう。

なけなしの羽根を見る。



イルサ もしかして・・・。

いや、それはいらななでも。

でも背中の荷物もどつか行っちゃったし。

いや、もしかしたら。

いやいや、それはいらななでもさあすきじゃ・・・

でも。もしかしたら・・・

飛べないって思ってただけで、本当は飛べるんじゃないかな

いや、しかしそれは仮説

うわー。ママタとごらるご一緒にいゝごちまで変わってさあすきだ。

よし。実証しよう！

いいのか？小学生がそんな難しい実験してて。

あ、いいよね。ママタじゃなげげに「危険に危険はつきまのた」

ちゅっとなら、そうちゅっとなら。ちゅっとなら飛べるよね。

そうちゅっとなら、そこの枝。

ちゅっとならげげに、あまあまは種ごひがごい。落ちても痛くない。・・・は。

飛んでみる。

イルサ  
たー。

隣の木の中腹にぐっぐ。

イルサ  
やったあ飛べた！

今の場所と飛んできた場所をよ／＼見る。  
多少降りてはいるが、進たてはいる。

イルサ  
待てよ。じわ／＼と降りてくるとだ／＼な。  
ぐっぐと降りてくると降りてくるとだ／＼な。  
やった。明ぬる／＼移動はきい……

登って、飛ぶ。

イルサ  
たー。

隣の木の中腹へ。そしてさらに登り、飛び、隣の木への繰り返し。

イルサ  
はあー、はあ。でも一体。アマタはどこにいるんだよ。

はーあ。こんなとき待ち合わせ場所さえ決めておけばなあ。

それさえ決めておけば何とかかなったんだけど。

待てよ。アマタは電波塔を目標してるんだよな。

うてておなじくおなじくを目標せばいいんじゃないかな。

そつすれば合流できるかもー！

うて電波塔はいいよ。

ぶおおおおおおお！(シエット機のような飛び方をする、大きなこびと)

こびと はっはっは。はーはっは。

私ほど大きな声のこびとならあなたにも聞こえるでしょう！はっはっは。

イルサ きみもこびと？

こびと はっはっは。少年一人の片割れは君か。なるほどニフトリビトだな。

はっはっは。君たちのせいで森はあちこち災害にみまわえている。

まあしかし、こどもにその責任はとれないな。いいだろう

私が電波塔の方向を教えよう！ただし、自分の力で行くんだよ！

イルサ ありがとう！こびとのお兄さん！

こびと はっはっは。例には及ばないさあ。お兄さんは救助活動があるんで先を急ぐよ。

電波塔は、電波塔は・・・あっちだ！

イルサ おおおー！

・・・位置決まってるじゃないんですか？

こびと あはん？何を言っているっみんながあると思っっている場所に電波塔がある。

みんなの意識はちょっとずつ変わるだろ。

毎日ずれていったっておかしくないだろう。

イルサ は？

こびと では、な、ら、い、だ、ー、と、う、ー！

ひら おおおおおおー！

イルサ ああ、い、う、体、育、会、系、は、疲、れ、る、ん、だ、よ、な、。い、い、や、つ、だ、っ、た、け、ど、。

あ、は、は、。僕、っ、て、ち、よ、っ、つ、ず、る、ん、じ、か、か、せ、。

電波塔は今日も田はあつちかな。し。い。な。む。な。ま。ま。タ。タ。す。は。へ。へ。ち。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。

イルサ、飛たててい。

小川沿いにアマタ。

アマタ

はあ。やみくもに走ってもダメかなあ。

あーもう。イルサどこだよお。

やっぱり電波塔の場所だけでもわかんないかなあ。

他に目印になるようなところないし

いるさあああー！

無駄かあ。イルサもこんなふうに探してるのかなあ。

あまたあどここっけエエとか。

ああもうイルサどこだよお。

少女が現れる。(俳優なら少年。女優なら少女を)

それは森の主の一面じしん、気質は若干違っただ。

森の主 何を探しているの

アマタ え？

森の主 なぜ電波塔を目指すの

アマタ 君は人間？

森の主 ……どうかしら？

アマタ 僕は願いを叶えてもらうために電波塔に行くんだ。

森の主 そう。どんな願い？

アマタ 僕は友達とサブナに行くんだ。

森の主 それは本当の願い？

アマタ 本当かどうかっていわねても…

森の主 本当の本当の本当はもっと深く、もっとわかりやすく、また純粹でまると私は思う。

見つめなおしたら歩むがいい

アマタ 本当の本当？

森の主 限りなく透き通る思いを見つめなさい

アマタ あ。待って

森の主 サブナに行くのはおまけでしょ。

少女、去る。

アマタ

僕はイルサとサプナにいつて。それだけじゃないか。

イルサは約束を守ってくれるから。

僕がどんなに大人になってもきつと一緒に来てくれるから。

・・・イルサは約束を守ってくれる。

うげくまっているよ、何かを見つけて。

アマタ

あれ？ここ小さな家がいっぱい。

あ。この木倒れたばかりだ。

ちつすこしで家がつぶれるところじゃないか。

全身を使って木をどかす。



アマタ よいしょ・・・はあ。

でもなんで誰も住んでないのかな。

あ、そつか。あっちでも木が倒れてだし、みんな避難してるのかな。

森を守る青年か。みんな仕事なか。

あああああ。こびとさあん。電波塔はどっち！

電波塔はどこなのおおお。

ひおおおおおー！(ジェット音)

アマタ ぶおー！

こびと はっはっは。私を呼んだのは君かな？

アマタ すみません。声は大きいんですがなんて言ってるかわかんないんです。

こびと そいつはこまったなあ・・・よし私が電波塔の位置を教えよう

電波塔は(電波塔のつよつよな形) 電波塔はああ・・・ああ・・・あっちだあめー！

アマタ なんてわかりやすいんだあー！

ありがとうございます。

こびと 私は忙しいのなまじはだ。とっ！

ふうおおおおおー！(去る)

アマタ じゃあねええこびとさあん。

あー。暑苦しかったあ。

はー。電波塔はあっちかあ。ふーし。とにかく早くぞお。

アマタが去ると、少女がいる。

森の主 森になじんできたな。人間には知恵があるといっことか。

人間と・・・ニワトリピトか。

少女、去る。

早歩きしているアマタ。

アマタ あのへんじゃないかな。そんなに遠くないよね。

じれったいなあ。そこにあるのに。

短いなあ子供の足って。別に大人になりたいわけじゃないけど。

よし、もうひとがんばりだああ。

上空から声

イルサ アマタあああ

アマタ イルサ？

イルサ アマタあ、ちょっと待っててえええ！

は  
あ  
あ  
あ

イルサ、降りてくる。

アマタ イルサ！わーイルサ！イルサだ！

イルサ アマタだ！。アマタ。電波塔の場所わかった？

アマタ うん。

二人 電波塔はあああああ、あっち！

イルサ 君の冒険がどんなだったかわかった気がするよ。

あとは進むだけ。

アマタ なんかイルサ変わった？

イルサ そう？・・・あそつそつトサカのことなんだけとさ・・・

二人去る。

#### 第九場「電波塔」

開けた場所で電波塔を見上げている一人。

アマタ イルサ。これが

イルサ ついにたどりついたんだ

アマタ ・・・長かったね

イルサ うん。こわかった

アマタ 大変だったね。

イルサ うん。大変だった

アマタ たどり着いたんだ

イルサ ついに ついに

二人 電波塔に

イルサ やったあ。

アマタ オスタークの深い深い森の中には電波塔があるっていつ。

イルサ 本当だったね

アマタ ねえ、どうやって願い事かなえるの？

イルサ ケ？アマタ知ってるんじゃないの？

アマタ わかんないよ。そつだ、入り口を探そう

ぐんぐんぐん。

アマタ ……あれ？入り口がない

イルサ ねえねえアマタ。なんかここから登れるみたいだよ

アマタ 登るのは危ないんじゃない？

イルサ ふっふっふー。イルサは高いところからでも降りられるのだー。

アマタ そうなの。じゃあいいのかな。

イルサ うん。こんなのイルサにかかねばびよびよいのびよいだよー。

登る

アマタ ねえ、本当に大丈夫ううう

イルサ 大丈夫だよお

アマタ 気をつけてねえ。

イルサ わかったよおおお

アマタ イルサ！

イルサ なぁぁぁにいいい？

アマタ 雨雲が来てる！

イルサ わかった。早く登るね

アマタ 下りたほうがいいよおお

イルサ いつでも降りられる。登るだけ登ってみるよ！

アマタ 落っこちないでねえ。

イルサ。ねえ聞こえてる？いいえ

イルサ 雨が羽根が重いなあ

アマタがなにか叫んでいるが聞こえない

どっじゃあ。ゴロゴロゴロ！びしゃあああああ！(落雷)

アマタ イルサあああ！

どぞ。

アマタ イルサ、イルサ、イルサってば。なんでだよ。

なんで黒いの？どうして焦げてるんだよ！

イルサ死んじゃうよ。死んじゃうよイルサ。なんでそんな無理してたんだよ！

なんとかしないと。ねえ、聞こえてるイルサ。

誰か何とかして！イルサが！僕の友達のイルサが黒こげに！

(バチバチに) 誰か！誰かお願いします！

ごびとさん！どうして僕はーばくらは森に入っちゃいけないの。

いっぱい邪魔もされて。森の主にも怒られて。今度は雷に打たれて。

誰か、誰かお願いします。イルサを助けて！

電波塔でもいいよ！イルサを助けてー！！

誰でもいいから



こびと 大丈夫ですか大丈夫ですかあ。こ、これはひどい。真っ黒焦げじゃないか。

これは！

うわっわああ。なんとかしたいんですが、手伝ってくれないと難しいですよ。

だからあ、一緒に運んでください。僕ではこの二フトリビトの少年を運べないんです！

あああ、通じないのかあ。

アマタ ねえなんて言ってるの？

こびと だからですねえあーもうなんで話を通じないの？

アマタ イルサがいれば会話ができるのに。そんなの矛盾だよね。

こびと もしかして、森の生き物の言葉がわからなくなったから人間は森を出て行ったのかなあ。

・・・今はそれどころじゃないよ。どうしたらいいんだ。

こびとが全員集まったら・・・無理だよね。

みんなこの雨で救助の人手が足りないんだ。あなたたちにも手伝ってほしいくらいです。

アマタ だめなの？ そうなんだね。やっぱり人間は森に来ちゃいけないかったんだ。

こびと そんなことないですよ。泣いちゃ駄目です。

人間よ森に還ってきて。

心優しい人間なら僕らは一緒に森を守れる。

この子達はいい子だ。なにも悪くない。

アマタ　ごめんね、無理を言っ。君にも仕事があるんでしょ。

僕はイルサと森を出るから、君は仕事に戻っ。

こびと　放っ。なにかおけませんよ。

あなたたちも生き物です。同じ仲間だ。

アマタ　イルサ。僕ごうしたらいいかわかんないよ。僕も一緒に死んだらいいのかな。

いっばいお話し、したかった。

いっばい勉強して、お話し、サブナに行っ、イルサは飛んで。

・・・ねえ。僕らは願い事を叶えるためにここまで来たんじゃないか。

なにこんなところで黒焦げになってるんだよ！

僕はイルサに長生きしてほしいからここまで来たんだ！

こびと　電波塔は奇跡なんて起こしませんよ。

アマタ　君が元気じゃないと電波塔に来た意味なんてないんだよ！

森の主 その願い、叶えよう

こびと 雨がやんでいく

森の主 人間の少年。その願い、私が引き受けよう。

アマタ え？

森の主 そのニフトリビトの少年が長生きをすると助かるものがたくさんいる。

私が手伝ってあげよう。

アマタ じゃあ、イルサを長生きさせて

森の主 それはできない

アマタ じゃあ、なんで。

森の主 私は手伝っただけだ。そのニフトリビトを長生きさせるのは君の仕事だ。

アマタ 僕にはそんなことできません！

森の主 大人になったら・・・できるかな。

アマタ 大人なら・・・できるかもしれない。

森の主 よし。その子は私が預かる。君が大人になったらかえしてあげよう。

アマタ でもそれじゃあ、イルサ死んじゃう

森の主 死なせはしない。ただ。この子の全ての時を止めよう。

黒こげから治ったら、死にもせず年も取らず、君が迎えに来るまで時を止めよう。

アマタ 僕が大人になったら

森の主 迎えに来なさい。その子を大人にするために

君が君の願いを叶えるために。そして私が森の願いを叶えるために

こびと 電波塔は何も叶えない。電波塔は願いを叶えるきつかけなんだ。

アマタ 僕。いっぱいいろんなことを考えて、いろんなこと覚えて、また森に来ます。

・・・オスタークに。

森の主 さあ。おうちへ帰りなさい。

こびと 君もこびとの仲間だよ。じゃあねええ。

森の主 こびとは君が仲間だと言っている。

さようなら、人間の少年。大きくなるのはあつという間だ。

アマタ また来ます。

アマタ、見送られる。

第十場 「大人になったアマタ」

森の入り口にアマタがいる。

アマタ

僕はたくさん勉強をし、友達をたくさん作り、いろんなことを覚えて、大人になった。様々な研究をし、僕はニフトリビトの成長に関することなら誰よりも詳しくなった。

ニフトリビトが短命だったのは

人間の食事や鶏の食事というニフトリビトらしくない食事をしてきたからだ。

僕はニフトリビトに最も適した食事の、だいたいのがわかってきた。

もはやニフトリビトは以前の二倍の時間をかけて生きることができるよう。

もつじぎ、人間より長生きするニフトリビトもでてくるかもしれない。

ニフトリビトは賢いから、もっといろんな工夫が始まるだろう。

僕は自分の願いを叶えるために大きくなった。

そして今日。イルサと再会するためにオスタークの入り口で待っている。

森の中からイルサが現れる。

イルサ やあアマタ

アマタ やあ優等生。

イルサ おや優等生。こ機嫌いかが。

アマタ 人間の優等生はついにニフトリビトの長寿に成功したんだ。

イルサ ニフトリビトは長寿になると森の主になるんだ。

アマタ え？

イルサ 森の主の寿命が近いんだ。それでこびとが困ってる。・・・その願い。

二人 叶えよう。

アマタ オスタークの深い深い森の中には電波塔があるという。

そして電波塔は願いを叶えてくれると誰かが言っていた。

電波塔に行こうと言出したのは僕のほつだった。

かけがえの無い友人。ニフトリビトのイルサとの最初で最後の冒険だった。

『電波塔物語 アマタとイルサ』完

【奥付】

二〇〇一年 盛留真悟作品

『電波塔物語 アマタとイルサ』

企画／御堂鈴音(幻想粉)

原案／娛誠粒真一『オスタルク伝説』(ハップUCN)

作・脚本／毬宇斎悟達(ハップUCN)

作品ならびにキャラクター、ペンネームならびに組織名の著作権は全て盛留真悟のものです。  
舞台化、映像化、コミック化の際は所定の手続きをお願いします。





---

電波塔物語 アマタとイルサ

---

著 盛留 真悟

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---